慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	胡風遺著読後感
Sub Title	My impressions of Hu Feng's posthumous works
Author	王, 凡西(Wang, Fanxi) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.37 (2006. 9) ,p.102- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20060930-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

胡風遺著読後感

王凡西著
長堀祐造訳

［訳者解題］

本稿は、香港トロツキー派の雑誌『十月評論』一九九四年第一期に掲載された、著名な中国トロツキー派指導者の一人、王凡西［一九〇七―二〇〇二］の文章である。

王凡西は浙江省海寧県硤石鎮の生まれ。その回想録『中国トロツキスト回想録』[1]によれば、王は湖畔詩社の二将、馮雪峰、潘漠華がすでに文名を馳せていた杭州第一師範に隣接する省立甲種商業学校を経て[2]、一九二五年、北京大学預科に進学。同級生に、後年ともに中共の文芸政策の犠牲者となる王実味、張光人（後の胡風）がおり[3]、馮雪峰ともこの頃知り合いとなる。北大の三年先輩に当たるのが[4]、のちに魯迅作とされ人々に記憶されるところとなった「トロツキー派に答える手紙」の端緒を開いた陳其昌（陳仲山）であった。ほどなく、王は中共に入党。二七年にはソ連留学。クートベ在学中の一九二八年、他の中国人留学生とともに、トロツキー派組織を当地で結成。帰国後も組織決定に従い、中共党内に残って、中央組織部の周恩来のもとで活動するが、ソ連からの通報でトロツキストであることが発覚し、一九三〇年中共から除名される。以後、陳独秀を指導者とする中国トロツキー派の指導的一員として活動。一九三〇年代には国民党による二度の逮捕投獄生活を体験する。中国トロツキー派の分裂に際しては一九四九年、鄭超麟らと少数派組織、国際主義労働者党を結成。中共の内戦勝利後、組織決定により、鄭超麟らを大陸に残し、香港に赴くも一九五二年、英国香港政庁によって追放され、マカオに滞在。中国当局の誘拐策動を察知して、一九七五年からは英国リーズに居を移して文筆活動を継続し、ここが最期の地となった。

元来、創造社に傾倒する文学青年だった王凡西は北京大学時代には同郷の教授、徐志摩の知遇を得、『現代評論』や『語糸』に投稿していたこともある（王文元の名で発表されたこれら短文のテクストは現在では日本でも当該雑誌のリプリントで見ることができる）[5]。また、香港時代には、生活費を稼ぐため、映画や演劇の脚本を書いていたというが、残念ながら、これらについては未見である[6]。さらに、王凡西は一九六〇年にトロツキーの名著『文学と革命』の第一部を翻訳し、一九七一年に到って恵泉の筆名で香港信達出版社から刊行している。このほか、一九七三年に双山の筆名で同じく信達出版社から刊行された『毛沢東思想論稿』の一章「文芸政策与文芸創作」は毛沢東と中共の文芸政策に対する解説、批判として優れた文章であり、高度な学術的達成を示している。また、「談王実味与『王実味問題』」（香港『九十年代月刊』一九八五年五月）、「従魯迅的一封信看到陳其昌」（香港『中報月刊』巻号未詳）などの文章も中国現代文学史の空白を埋めるものとして重要であり、特に前者は王実味の名誉回復という中国大陸の政治状況にも参与する役割を果たした。日本ではこうした香港誌の掲載した原資料は中々見られないが、訳者の手許には、著者から直接送られてきた修正原稿があるので、本編に続いて、本誌上で翻訳紹介していきたいと考えている。

さて、本稿は一九八五年に死去した胡風の二編の遺著を読んでの感想である。

「三十年代前期の魯迅に関わる二十二条の質問［関于三十年代前期和魯迅有関的二十二条的提問］」（『上海魯迅研究』五、一九九一年九月、及び『新文学史料』一九九二年第四期掲載）は、一九七七年にいまだ獄中にあった胡風が、一九八一年版『魯迅全集』日記巻の注釈作業のためのインタビューに答えたものである。一九三六年、魯迅最晩年に発生した国防文学論争に際し、魯迅の側に立ち、周揚らに対抗した胡風はトロツキストの嫌疑をかけられたことを語っている。このインタビューで胡風はかなり率直に様々な人物について語っているため、掲載誌『上海魯迅研究』はしばらく、刊行を差し止められるという事態が発生した。

一方、「魯迅先生」は『新文学史料』一九九三年第一期に掲載された[7]。魯迅の作とされ、魯迅のトロツキー及び中国トロツキー派に対する否定的見方を人びとの中に固定化してきた「トロツキー派に答える手紙」が、実は馮雪峰の執筆になるもので、魯迅に責任を負わせることはできないということを、胡風はこの手紙が世に現れる現場に居合わせた証人の資格で語っていたのである。また、「魯迅先生」で胡風は、厨川白村の自身に対する影響やロシア・ソ連の詩人ブロークの詩集『十二』について（魯迅はトロツキーの『文学と革命』か

ら第三章「アレクサンドル・ブローク」を訳出し、北京で一九二六年刊行された胡敷訳の訳詩集『十二個』の「付録」とし、その巻頭に置いた）、さらには陳独秀に対して魯迅が終生、敬意を抱き続けたこと、などを語っている。

こうしたことについてはすでに拙稿「『トロツキー派に答える手紙』をめぐる諸問題」正・続（『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院、一九九八年一〇月、及び『二三十年代中国と東西文芸――蘆田孝昭教授退休紀念論文集』東方書店、同年一二月）でも論じた。また、本編が触れる陳独秀と魯迅に関することについても、二〇〇五年春の本誌No.34所載「魯迅と陳独秀」で詳論した。参照頂ければ幸いである。

なお、本稿は、著者から訳者に送られてきた、初出掲載誌に著者本人が手を入れたテクストに基づいて訳出している。訳文中、（　）は原注、［　］は訳注を表す。その他、長めの訳注は訳文の後に別に付すこととする。

［訳者解題］注

（1）矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年。原著は『双山回憶録』香港周記行出版社、一九七七年、及び同書増補版は香港士林図書服務社、一九九四年。

（2）筆者が二〇〇〇年に北京大学档案館で調査した資料、『国立北京大学一九二五年度学生（履歴）一覧』によると、王凡西については以下のような記載がある。

系部・科級：預科乙部英文班一年級　姓名：王文元　籍貫：浙江桐郷　年齢：二〇　経過学校：浙江安定中学畢業。

（3）『北京大学日刊』、中華民国十四年八月一日付（一九二五年）の一面には、この年の本科、預科合格者三百四十五名の名が掲載されており、そこには確かに王思褘（王実味）、王文元、張光人（胡風）の名が見える。

（4）同じく『北京大学日刊』、中華民国十一年八月五日付（一九二二年）の一面の同年預科合格者名簿の英文班に陳其昌の名が見える。

（5）王凡西の投稿作品はエッセイ、小説である。『語糸』第百二十六期・百四十六期（一九二七年四月、八月）、『現代評論』第四巻第九十九期（一九二六年十月）を参照。『語糸』第百四十六期には魯迅・周作人らも執筆している。その他、興味深いのは、王凡西がトロツキー派に転じて久しい一九三七年、茅盾が実質的編集者だった『文学』誌の第八巻第三号・第四号（一九三七年三月、四月）に、王凡西訳、ロシアの批評家ビーサレフ作と覚しき「プーシキンの抒情詩」という文章が訳載されていることである。これが、王凡西その人であるとすれば、茅盾という人物の性格、人脈、中共の統一戦線政策などが影響してのことか。なお、本注は『中国現代文学期刊目録匯編』（天津人民出版社、一九八八年）を参考とした

（6）『双山回憶録』香港周記行出版社版の三二〇頁にある、「王凡西先生近年的著作和翻訳」リストに、『三齣小戯』（一九六八年）、『電影漫談』（一九五六年）などという書名が見える。

（7）後に『胡風回想録』（人民文学出版社、一九九七年）にも収録されたが、王凡西がここで触れるような「トロツキー派に答える手紙」をめぐる胡風の言の微妙な部分は削除された。朱正著「重読『答托洛斯基派的信』」（『魯迅研究月刊』二〇〇五年第十期）を読んで気づいたが、『魯迅回憶録』散編、下冊（北京出版社、一九九九年）では削除されていない。

（一）

最近胡風の二編の遺作を読む機会があった。「三十年代前期の魯迅に関わる二十二条の質問」と「魯迅先生」である。この二編は非常に重要で価値ある文章だと思う。中国の一九三〇年代初期・中期における左翼文芸運動についての権威ある一次史料である。これによって当時魯迅周辺の中国文壇で起こった離合集散と恩讐、中共による政権掌握後の一連の思想闘争の淵源、さらにはスターリン、毛沢東の文芸政策がいかにして災禍を引き起こしたかを見て取ることができるのである。

しかし、これら史料を進んで利用し、問題を研究せんとする、優れた中国文学史家が当然のことながらおり、すでにそうしているものと私は信じている。私はこの方面では多くを語るつもりはない。私がここで簡単に述べたいと思うのはこの二編から見えてくる胡風自身の文芸上の見解についてだけである。もう少し具体的にいえば胡風がどのように文学と革命との関係という問題を解決しようとしたのかということである。

トロツキー派の一マルクス主義者として、私が胡風の文章でもっとも直接的に関心を持ったのは、いうまでもなくその一部始終をまじめに述べた例の魯迅の「トロツキー派に答える手紙」制作過程である。というのは胡風のこの証言は中国トロツキー派のために、ありもしない罪を今一度雪いでくれたばかりでなく、他人を誣告によって陥れたという責任から魯迅を最終的に救い出したからである。この件については本来詳しく語るべき意義があるのだが私の二人の旧友、楼子春と鄭超麟がすでにこれについて文章を書いている[1]ので、それによるばかりである。二人はこの「事件」について十分論じ尽くしているので、私にはさらに言うべきことはなくなってしまった。

唯一少しばかり補っておきたいのは陳独秀がこの手紙から導き出した魯迅評価の問題についてである。

私の『回憶録』中にはこの件に関して以下のような記載があった。

「[陳] 其昌がこの事件を引き起こしたとき、私は香港にいた。其昌は事前に他の同志たちと相談せず、それで事後、同志たちから大いに非難を受けた。とりわけ南京の獄中にあった陳独秀はこの件を知って大いに怒り、私たちになぜ魯迅に幻想を持つのかと問うた。陳独秀は魯迅の共産党におけるや、呉稚暉［一八六五―一九五三。清末のアナキスト、後に転向し、国民党右派の政治家］の国民党におけると同様で、奉られて恩を感じ、報いようとしてもはや利害を越えた是非の心を持つことはできなくなってしまったのだ」[2]と。

この段の回想は中国国内の中共党史研究家の間で反響を呼んだことがあった。陳独秀は魯迅に対して公平冷静な態度で対することができなかったと彼らは考えたのである。しかし、このうわべだけ客観を装う、いわゆる公正論は実は全く不公正なものである。当時陳独秀はまさにトロツキー派として蔣介石の獄に囚われていたのだが、唐突にかつての同志にして旧友［魯迅］が、こともあろうにこの上なく耐え難い罪状を、彼をリーダーとする派の同志たちにひっかぶせてきたのである。どうしてこの性烈火のごとき革命家が心の怒りをおさえることができたであろうか。「かけられた唾を乾くまで待つ」というのは革命家の品性ではないし、ましてや陳独秀という革命家のものではなかった。

残念ながら陳独秀は生前に胡風のこの証言を見ることはできなかった。さもなくば陳独秀は現在の私たち同様、魯迅を「白い老いぼれ」呉稚暉になぞらえた憤慨の言葉を撤回したであろう。

とはいうものの、陳独秀の魯迅に対する全体的な評価というものはこの誣告によって変わるものではなかった。一九三七年十二月［注3の日付参照］、陳独秀が書いた「私の魯迅認識」の一文中に私たちは次のような言葉を見ることができる。

「民国十六、七年、魯迅がまだ政党［中共のこと］に接近する以前、党の中に幾人かの無知な愚か者がいて、魯迅を一銭の価値もないと罵った時、私は魯迅のために大いに不満に思ったものだ。その後、魯迅が政党に近づくとその同じ無知な愚か者が突然魯迅を天よりも高く持ち上げたのである。魯迅先生はまるで以前は犬で、今度は神になったかのようだった」[3]

これは極めて公正かつ公平な評価である。実際魯迅本人の陳独秀に対する態度も一貫して公正、公平なものであった。それは他のことはさておき、陳独秀が党内で力を失った後、魯迅がいかにして小説を書くようになったかに言及した際、包み隠さずその功を陳独秀の激励に帰したということを指摘しさえすればいい。[4]

この点については胡風の証言も私たちに証拠を与えてくれた。胡風は言う。

「……魯迅は『新青年』の編集同人にして五四文学革命の指導者陳独秀に対しては一貫して敬意を表していた」[5]と。

＊　＊　＊　＊

胡風の文芸思想を語るには当然その著作を根拠としなければならない。しかし私はまずもって、以前には胡風のいかなる著作も読んだことがなかったということを認めなければならない。その主たる原因は私が文学と無縁だったからである。若い頃、文芸を愛好したとはいえ、共産主義運動に身を投じてからは、興味が移り、またエネルギーと時間がいつも不足していると感じたために、文芸作品に接することは極めて少なくなり、中国の文壇とは、左右の派を問わず遠く離れてしまった。

解放後胡風の例の三十万字の意見書[6]が大批判を巻き起こし、当然ながら私の興味を引いた。しかし、結局私は胡風の原著を探せなかった。後に反胡風の大運動の中で、「胡風反革命集団の黒い材料」が一まとまりずつ、公にされてきたが［一九五五年五月、六月『人民日報』に断続的に掲載、同月『関於胡風反革命集団的材料』として人民出版社から単行本が出た。その他ほぼ同時期に『胡風文芸思想批判論文彙集』一～五集が作家出版社から出ている］、私には読もうとする興味がなかった。モスクワ伝来の、異見を持つ者にむやみやたらと罪を着せるいわゆる批判闘争なるものの中では、決して批判される者の本当の意見は見ることができないと、私はよく知っていたからである。

そこで私はあらかじめ宣言しておかなければならない。ここで述べようとする胡風の文芸観は前述の二編から見られるものに限られるということである。これは疑いなく極めて限定的で、浅薄なものであり、誤解すらあるかもしれない。

二編の文章の中でもっとも私の興味を引いたのは以下の一段である。

「一九二六年、彼（魯迅）の手で紹介されたソ連作品の中で私がもっとも影響を受けたのはA・ブロークの長詩『十二』［中国語原文は『十二個』、十二人の意。邦訳題は『十二』で通用しているようである］であった。その詩は十月革命が巻き起こした全社会生活の暴風雨のような旋律を反映し、私をもその中に巻き込んだ。魯迅の「後記」は私の詩理解を助け、また革命とはいかなるものか、革命がいかに作家と文学に影響するか、いささかなりとも理解する助けとなった。これ以前に私は魯迅が訳した廚川白村の『苦悶の象徴』を読んだことがあり、そのおかげで創作過程における私の通俗社会学的理解の一掃が促された。私は廚川の出発点が唯心論であることは知ってはいたのだが、このとき魯迅の「後記」はそうした私の認識を一層確信させてくれたのであった。」（「「魯迅先生」中の一段」「新文学史料」一九九三年第一期第五頁に見える）

この段の重要性を説明するにはまずこの長詩の訳書の内容を紹介しなければならない。私もこの訳書は読んだことがあり、大きな影響を受けた。しかしその影響は詩自体からの直接的なものではなく、詩集の後に付された付録と、また魯迅本人がその付録から取り出し、完全に意見の一致を見たところのこの長詩に関するいくつかの意見とであった。

はっきり覚えてはいないが、長詩の訳者は胡敷という名で、訳文は忠実なものだと私は思った。[7] 魯迅は誠心誠意にその訳詩集の紹介と出版のために事前に子細な校合を行ったに違いない（あるいは日本語版と照合したのかもしれない。もし日本語版がすでに出ていたならば、と言うことだが）。[8] しかし私たちが知るとおり、訳詩は難しく、ましてやブロークのような詩はなおさらである。この象徴主義の詩人の詩はその独特のリズム、韻律、調子で有名で、それらはロシア語という言語と有機的に結びついていた。それを理解するのは元々難しいのに、訳詩を通してはなおさらだった。他言語に訳すとなると、せいぜい具体的な内容を残すという程度であろう。しかし、この詩の具体的内容は、この詩を優れた詩としているすべての抽象的要素を取り去るなら、実際余すところはほとんどない。外国詩人の名詩の訳詩を読むと、しばしばそのどこがいいのかわからなかったり、あるいは天書［神仙が書いた書物や手紙、転じて難解な文章のたとえ］を読んでいるようで言わんとするところがわからないと感じたりする。その主たる原因はこの点にあるのである。こういうときにはしっかりした見識を持った本当に詩文が理解できる文芸批評家が必要となる。批評家の「注釈」は私たちがこうした詩（とりわけ翻訳された

外国詩）の善し悪しの理由を理解する手助けとなる。魯迅が『十二』の後につけた付録[9]と、魯迅自身が書いた「後記」とはそうした貴重な役割を果たしたのであった。

では「付録」の作者は誰だったのであろうか。折しも本論で前述したトロツキー派の領袖トロツキーその人であったのだ。この「付録」は、もとはトロツキーの著作『文学と革命』の第三章「アレクサンドル・ブローク」であった。

私の手元に『十二』の中国語訳はない。この書の後記を収める魯迅の書もない。それで、魯迅がなぜトロツキーの文章を「付録」としたのか知りようがないし、また魯迅がなぜこの作者とその意見とを紹介したのかも覚えていない。幸い私の机上に一丁［別名、楼国華、楼子春など］著の『魯迅［其人、其事及其時代］』［パリ第七大学東亜出版センター、一九七八年］があり、その中に魯迅の「後記」から引用した文がある。トロツキー個人に関して魯迅はこう言っている。

「中国人の心の中では、たぶんやはりトロツキーはヤーッと声を張りあげ叱咤する[10]革命家にして軍人だと思われているであろうがこの文章を読めば彼が深く文芸を解する批評家だということがわかる。……」

私はまた一丁の文章から、トロツキーのこのブローク論を、魯迅がもっぱらこの詩人と長詩を紹介するためにわざわざ日本語版『文学と革命』から翻訳したらしいことを知った。ここから魯迅が当時トロツキーのことをいかに好意的に評価していたか、またいかにトロツキーの見解に同意していたかということを見ることができる。一九二六年三月十二日に書かれた「中山先生逝世後一周年」という文章の中で、魯迅はさらに自身が同意した見解について具体的に語っている。

「トロツキーはかつて革命芸術とは何かをこう説明したことがある。（それは）主題において革命を語らずとも、革命から生まれた新しいものによって裏付けられた意識に貫かれているものがそれである。さもなければたとえ革命を主題としても革命芸術ではない」（以上の二段はともに一丁『魯迅：其人、其事及其時代』二八四頁から引用[11]）

魯迅のこれらの言葉は全面的にトロツキーのブロークに関する見解を伝えているわけではないし、トロツキーの、文学と革命に関する関係及び共産党と労農政府が文芸に対してどのような態度をとるべきかといった様々な見解についても語ってはいない。（こうした見解はトロツキーが『文学と革命』の他の章で明らかにしている）しかし魯迅がここで語っているわずかな言葉は簡単明瞭に、トロツキーが

「通俗社会学」の革命文芸に関する見解に反対したことを伝え、同時にそうしたトロツキーの見方についての共鳴を包み隠さず表明しているのである。

胡風は自身がこの面で受けた影響を、廚川白村の『苦悶の象徴』が彼に与えた影響と重ね合わせていることは極めて興味深い。両者を関連づけ、そこから胡風はある認識に到達した。あるいはこれによって胡風に元々あった認識が「強化」されたといえるかもしれない。こうした認識は私から見ると、胡風のこの後の文芸創作及び文芸創作と革命との関係という問題に対する基本態度を決定づけたのである。

いかなる基本的態度であろうか。それはほかでもなく通俗社会学の観点から文芸の創作過程を理解することに反対し、通俗社会学の立場から発して、文学者や芸術家の創作活動を指導したり、干渉したりすることに反対することである。

私がこういうと胡風を曲解していると言う人がいるかもしれないが、それならば胡風の原文を子細に研究してみようではないか。

徐懋庸への手紙の中だったと思うが［「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について」、一九三六年八月作。『且介亭雑文末編』所収］、魯迅は善意から胡風のいくつかの小さな欠点にふれたことがある。その中の一つは、胡風がわかりやすい文章を書かないということであったと記憶している。[12] 今回胡風の文章を読んで私もいささか同感するところがあった。胡風はもちろん名文家であるが、語句が時にあまりに濃縮されているために含意が些か晦渋となるのを免れないのである。胡風の文章を十分に理解、鑑賞するには読者は時に苦労してじっくり考えなければならないことがある。

前に引用した文章の前半部で胡風はロシアの詩人ブロークの長詩『十二』に大きな影響を受けたと言っていた。また胡風がこの詩を理解し、そのことによって多少なりとも革命を理解し、革命の作家と文学に対する影響を理解できたのは魯迅の「後記」のおかげだと言っている。こうしたことは明々白々でいかなる説明をも要しない。

続いて胡風は魯迅が翻訳した日本の文芸批評家廚川白村著『苦悶の象徴』に触れている。胡風はこの本も自身に大きな影響を与え、「私の創作過程における通俗的な社会学的理解の一掃を促した」と言っている。続いて胡風はまたこう言っている。「私は廚川の出発点が唯心論であることは知ってはいたが、このとき魯迅の「後記」はそうした私の認識を一層確信させてくれたのであった」と。

この後半部は些かわかりにくい。というのはなぜ胡風は『苦悶の象徴』を読んで通俗社会学的文芸理解の一掃を促されたのか語ってい

ないからである。また廚川が唯心論から出発しているという事実と胡風の言う「通俗社会学的理解の一掃」とがどういう関係にあるのか語っていないからである。さらに魯迅の「後記」がどのように胡風の認識を強めたのか、その認識とはいかなるものか、指しているのが廚川の唯心論なのかそれとも通俗社会学の一掃なのかも語っていないからである。

胡風の言わんとすることをしっかり理解しようとするなら、ここで些か「注釈」を施し、この後半部の文章の思考経路を探しださねばならない。私の個人的な理解によれば、胡風の思考経路は以下のようなものである。

『苦悶の象徴』を読んで胡風は明らかに著者の創作過程に対する分析に引かれている。廚川は精神と心理の方面から文芸創造の原因と動機を追究しており、それは社会学者を自認する人たちの文芸に対する見方よりもずっと優れているのである。以前から胡風はこうした社会学者的見方に不満を持っており、廚川を読んでからはこの不満が一層募ったのであった。

しかし同時に胡風は廚川の見方が唯心論から出発していることを知ってはいた。なぜ、唯心論的美学者がかえって唯物論から出発する批評家よりも優れているのか。ここに胡風は矛盾を見たのである。

そして魯迅の「後記」を読んで胡風はハッと悟ったのであった。真のマルクス主義的社会学と胡風が知っていた通俗社会学とはもともと違うものだったのである。前者は弁証法的唯物論から発して、通俗社会学者よりも一層正確に文芸の創作過程を理解し説明するばかりでなく、唯心論から発する美学者たちよりもより精緻に文芸の創作活動を分析することができるのである。こうして胡風の矛盾は解決を見、同時に心中の通俗社会学的美学意識の残滓も最終的に一掃されたのであった。

私のこうした胡風文章に対する理解が本来の文意に百パーセント合致するものだというつもりはない。しかしこういう具合に理解して初めてこの部分の文章は意味が通り、本当の含意を理解できるものと確信している。

この段の文章がわかれば残った問題は以下の一つだけである。結局のところ魯迅の「後記」はどのように胡風のこの矛盾解決に役立ち、また通俗社会学一掃をさらに促したのかということである。私の手元に魯迅の「後記」はないので、つまるところ魯迅のどの語句がこうした作用を胡風にもたらしたのか指摘することはできない。しかし、魯迅の「後記」中の議論はその「付録」に基づくものなのである。私たちは「付録」の中から答えを探し出すことができるのである。

「付録」の作者トロツキーのブロークに対する全体的評価と『十二』というこの長詩に対する見方はざっと以下のような三つの要点にまとめられるだろう。

一、「ブロークは全面的に十月革命前の文学に属していた。ブロークの衝動は――神秘主義の旋風に向かったものであれ、革命の旋風に向かったものであれ、すべてが真空の空間ではなく、古いロシアの貴族・インテリゲンツィア文化の濃厚な大気のなかで起こっている。」［桑野隆訳『文学と革命』上、岩波文庫、一九九三年、一五九頁］

二、革命がおこり、「相次ぐ恐るべき出来事の音楽がブロークに吹きこんだのである。……ブロークは革命の受け入れを極限的なイメージで表現し、革命に極めて粗野な――それも粗野一辺倒の――表現をあたえている。娼婦たちのストライキ、赤衛軍兵士によるカーチカ殺し、ブルジョワの家からの略奪……そしてブロークはこれらを「受け入れよう」と言い、こういったこといっさいに挑発的にもキリストの祝福をあたえている。……」［同上一六三～一六四頁］

三、『十二』はこれら「時代に染まり時代を自分の言葉に翻訳しよう」として書いたものである。「この叙事詩がブロークの最高の成果であることに、議論の余地がない」［同上一六三頁］。「もちろんブロークはわれわれの仲間ではない。だがかれはわれわれのほうに突っこんできた。突っこんできて、くたくたになってしまった。だがかれの衝動の成果は、われわれの時代の最高傑作である。叙事詩『十二』は永遠にのこるであろう」。［同上一七〇頁］（以上の括弧内の語は恵泉［王凡西］訳中国語版『文学と革命』［香港信達出版社版］では一〇七～一一五頁）

魯迅は「中山先生逝世後一周年」の文中でトロツキーの革命文芸観に言及しているが、それは明らかに上述の内容を帰納したものである。この紹介はなかなかいいものである。しかし、上述の三点の意味を概括してはいない。（あるいは「後記」の中でかなり引用しているのかもしれないが、わからない）もし上述のような簡単な論述のみによるのなら、胡風が心中に残った「通俗社会学」の残滓を「一掃」するのを助けることはなかったろうし、この矛盾、すなわち廚川はどうして唯心論から発しながら、唯物論者を自称する通俗社会学者たちよりもよりよく文芸の創作過程を分析することができたのかという矛盾を解決する助けとはならなかったろう。

胡風のこの矛盾の解決は、例の「付録」を読み、さらに上述の三つの意味を理解した結果以外にない。

「付録」の作者はまずこう指摘する。ブロークというこの象徴主義詩人は表面上は時代や現実を超越しているかのようだが、実際は彼は「古いロシアの貴族・インテリゲンツィア文化の濃厚な大気のなかで生まれ」「十月革命前の文学に属していた」に過ぎず、さらにはそうならざるをえなかったのである。

これはマルクス主義唯物弁証法の社会学者が文芸批評に従事する際の基本的立場であり、文芸を理解し鑑賞する出発点なのである。

その後、「付録」の作者は二種の立場で、二つの方向から詩人とその特定の作品、つまりその詩を扱う。まずは革命家の立場で革命の方向から詩人が奇妙なやり方で革命を受け入れていることを指摘している。詩人は「革命の受け入れを極限的なイメージで表現し、革命に極めて粗野な――それも粗野一辺倒の――表現をあたえている」と言い、さらには詩人が愛するイエス・キリストを持ち出して革命に「祝福」を与えているとさえ言っている。別の方向から「付録」の作者は、文芸批評家、鑑賞家の立場でこう指摘する。革命が詩人固有の「蚊のなくような個人主義のかよわい口調を、革命はうなり叫ぶ破壊の音楽でもってかき消しつつあった」中で、詩人に『十二』を書かせ、「ブロークの最高の成果であることに、議論の余地がない」詩を書かせ、「われわれの時代の最高傑作」を書かせ、この詩は「永遠に残るであろう」と。

「通俗社会学」の観点からすれば、上述の二点は矛盾する。なぜ革命の観点から見て極めてひどい詩が、芸術的観点からみると、「不朽の作」となるのか。この矛盾は胡風が『苦悶の象徴』を読んで感じたところのものよりさらに根本的かつ顕著なものであった。

『文学と革命』の作者はこの矛盾をどのように解決（或いは説明）しているのだろうか。

ブロークについての専論たる「付録」の中で、作者はことさらこの問題に対応する回答を与えてはいない。作者はただ簡単についでながらにこう言っているに過ぎない。「詩人は時代を自分の言葉に翻訳しようとしていた」と。この言葉は思うに、我々が正確に理解できれば、それでもう簡潔かつ的確に上述の矛盾を解決しているのである。「時代を自分の言葉で翻訳しようとしていた」とは何を言っていたのか。この言葉こそ文芸の全体的創造過程である。真の芸術家は外界の影響をうけ、その影響を文学や他の芸術形式によって表現しようとすれば、まずこれら外在的な様々なものを「自分の言葉に翻訳」しなければならない。この「翻訳」過程は絶対に直接的、機械的なものではなく、また絶対に人の命令によることはできず、絶対的に誠実、自発的なものでなければならない。さもなければ些かなりとも

真に芸術的価値を持つ作品は生まれないのである。

社会学――我々が言うのはマルクス主義的社会学であり、決して通俗社会学ではなく、ましてや官僚的御用社会学でもないが――はある文芸作品の時代背景を指摘できるし、また指摘しなければならない。またその作品が生まれた客観的条件を分析することができる。しかしそれは決して作品の創作過程を規定したり、創作方法を指導したりすることはできない。というのは「付録」の作者は『文学と革命』の他のところで繰り返しこう言っているからである。マルクス主義の方法は決して文芸創作と文芸鑑賞の方法ではない、と。たとえば第五章「詩の形式派とマルクス主義」の中で以下のような透徹した見解を述べていたのである。

「芸術作品を退けるべきか受け入れるべきかをマルクス主義の原則だけで判断するのはけっしてできないというのはまったくそのとおりである。芸術的創造の産物は、まず第一に、それ自身の法則、つまり芸術の法則によって判断されねばならない。しかし、なにゆえどこからその時代のその芸術流派が起こったのか、つまりだれがなぜ、ほかでもないこのような芸術的形式を要求したのかを説明できるのはマルクス主義だけである」（前出恵泉訳［中国語版］―一六五頁）［岩波文庫版上―二四五頁］

上述のような理由で、「付録」の作者は一方ではブロークが極めて奇怪な方法で革命を受け入れていることを指摘しながらまた一方ではその詩が大きな成果だと賞賛したのはまったく矛盾しないのである。

胡風が当時、『十二』と魯迅の「後記」を読んで心中の「通俗社会学」の影響を一掃したのには、もちろん胡風自身の思考方式があり、彼自身の思考過程を経たものだった。胡風の思考方式とその過程が私の上述の内容とどれほど似ているか、言うつもりはない。しかし、一つ確言できることがある。胡風の文芸思想、特に文芸創造と社会学の関係についての認識は、間違いなく魯迅の仲立ちによって間接的に『文学と革命』の著者、すなわちトロツキーの影響を受けているのである。

非常に残念なことに私は今に至るまで、胡風の例の意見書を読んだことがない。胡風の言うところの有名な「五つの刀」[13]というのが一体何を指すのかわからない。「言葉通りに意味を解すれば」、胡風は主として、為政者に「通俗社会学」の立場で文学家やその他の芸術家

の創作活動に命令したり干渉したりしないよう希望したのだろうと私は思う。

芸術家や、精神創造活動に従事するあらゆる人は、外部世界の諸要素を自身の内心の言葉に翻訳する際、十分な自由と独立がなければならず、さらに誠意と自由意思が必要で、それらがあってはじめて不朽の芸術作品を創造することができるのである。さもなければ、どんなに才能に恵まれようとも、結局本当に価値ある作品はひとつとして書けないのである。

こうした「通俗社会学家」が大権を握るに至り、彼らの文芸政策を実行したために無数の血と涙の悲劇が引き起こされ、すでに数十年来、ソ連と中国の真実の歴史がそうした無数の例を提供しているので、私がここで贅言するまでもない。

だとすれば、労働者・農民の利益を代表する政党が政権掌握後、文芸活動に対して絶対的放任政策を採るべきなのであろうか。これは長年論争の的であった。歴史は我々にすでに多くの正反両面の証拠を与えてくれているが、社会主義者の間では終始一貫相変わらず諸説紛々である。ここまで述べてくると、私はどうしても『文学と革命』の一段を引用しないわけにはいかない。それは「ブローク論」の章ではなく第五章［「詩の形式派とマルクス主義」］の一段である。

「芸術が客観的に社会に依存し社会的な効用をもつものであるといったわれわれのマルクス主義的解釈は、政治用語で置き換えたにしても、法令や命令書でもって芸術を指揮しようとすることを意味することにはならない。われわれにとって新しいものとか革命的なものは労働者について語っている芸術だけであるなどというのはまちがいであり、われわれが詩人たちに工場の煙突とか資本に対する蜂起！をかならず描くよう要求しているなどというのはたわごとである。むろん、新しい芸術は本質からいってプロレタリアートの闘いにまず注目しないわけにはいかない。しかし、新しい芸術の犂は番号をうった耕地にかぎられているわけではけっしてなく、逆であって、その犂は畑全体を縦横に耕し尽くすべきなのである。ごく限られた範囲を扱った個人的な抒情詩にしても、新しい芸術の枠内に確固たる存在権を持っているのである。それどころか、新しい人間は新しい抒情詩なしには形成されない。……」（恵泉訳［中国語版］―一五七～一五八頁、岩波文庫版上―二三四～二三五頁）

これは著者が一九二三年に発表した意見であり、ソ連共産党人がもっとも早く発表した革命政府と文芸活動についての権威ある立場と言うことができる。残念ながらこの立場はソ連とソ連共産党の他の面での変化につれて変化していき、ついにはこれとは正反対のところまで行ってしまった。トロツキーに「不正確」で「でたらめ」なものと指摘された様々な事柄が一々実行に付されたばかりか、一層改悪されて、すべての文芸創作を「偉大な領袖」を賛美する詩のみに限定してしまったのである。政府が法律と命令で芸術を統制することに一貫して反対し、新芸術は必ずやあらゆる方面のすべての土地を耕すべきだと主張した人々は、一人の例外なく、胡風の受けたような、或いはもっと悲惨な目に遭うことになったのである。

（二）

年をとり、力つきて、構想を練ったり、ものを書いたりすることが極めて困難になってきた。上述のひどく無様な文章もなんと一月あまり断続的に書き継いだものなのである。書き終えて、読み返したが非常に不満で屑籠に捨てようと思った。しかし、老友の一丁兄がそれを知り手紙をよこして強く押しとどめ、少なくとも自分に原稿を郵送して見せ、本当にだめならそこで処分しても遅くはなかろう云々と言ってきた。時を同じくして、熱心な友人がわざわざ魯迅の『十二』の「後記」をコピーして送ってくれた。読後、もう少し言いたいことがある、と感じたので屑原稿の廃棄をやめたばかりでなく、さらにそれに尻尾をつけようと思ったのである。

魯迅の「後記」の原文が手に入ったので、本来なら拙稿中のこれと関連する段落について書き直すべきであろう。しかし、そうした書き換えは大変な労力を要するので、省力のためにこの「尻尾」でもって、些か説明を加えることで良しとしたい。

私は前でこう記した。手元に魯迅の「後記」がなく、魯迅のどの言葉が胡風の心中の問題を解決する助けになったのか指摘することはできない。しかし私は大体のところは記憶しているので、魯迅の「後記」はトロツキーの「付録」に淵源すると深く信じている、と。今、魯迅の「後記」原文を読んで私の記憶と推測に誤りがなかったことを自ら喜ぶものである。私は魯迅の原文を持論の証拠としても差し支えないこととなった。「後記」中で表明された見解は間違いなく『文学と革命』に基づくものである。魯迅はここでまったく散文詩的筆

致で『十二』の作者とその詩を紹介し解釈しているのである。魯迅はトロツキーが「アレクサンドル・ブローク」の章で述べている様々なことを魯迅自身の言葉で説明している。魯迅がどのようにトロツキーの言葉を言い換えているか見てほしい。

「血と火を招き呼ぶにも、酒と女を詠嘆するにも、おぐらい森や秋の月を賞でるにも、真に傾倒する心が必要であって、そうでなければ、みな空洞だ。人は多くは「生命の川」の一滴である。過去を受け継ぎ、未来に向かい、もし本当に優れていて並はずれているのでなければ、前進と回顧をあわせもつのは、やむを得ぬところである。詩『十二』には、このような心が見られる。彼は前進する、だから革命に突進した。しかし、回顧もする、そこで傷ついた。」

「篇末に出現するイエス・キリストは、二通りの解釈ができるようだ。一つは、キリストも賛成するという解釈であり、一つはやはりキリストによって救われる、という解釈である。いずれにせよ、結局のところ後者の解釈に近いと思う。だから、十月革命におけるこの大作『十二』も、まだ革命の詩ではない。」

「しかし、空洞の詩でもない。」

「『十二』は、かくして十月革命の重要な作品となったし、永遠に人々の口に上る作品となるであろう。」[14]

魯迅は自分の言葉で『十二』に注釈を加えているが、これは詩人の詩人に対する共鳴である。また文芸創作過程についての理解においても、魯迅はトロツキーの以下のような論点に完全に同意している。つまり、詩人は内容のある、「空っぽ」でないものを書こうとしたら、「真なる憧憬の念が必要である」、すなわちまず「時代を詩人自身の言葉に翻訳しなければならない」ということである。

人はしばしば詩人（と一般の文芸家）を「鏡」になぞらえ、彼らがあるがままに客観を反映することを賞賛する。しかし、こうしたたとえは一面的であり、不正確でもある。もし、文芸家の能力はただ客観（社会と自然界）をあるがままそっくりに反映することだけだとするなら、それは「通俗社会学」の観点であり、間違っている。なぜ間違っているかと言えば、そうした考え方は、すべての芸術創造の中で、決定的な役割を果たすあの芸術家たちの「真なる憧憬の念」を無視しているからである。また、いかなる芸術創造であれ、そのも

っとも重要な鍵となるのは「時代を詩人自身の言葉で翻訳しなければならない」ということを無視するからでもある。

私は胡風がまさしく魯迅の「後記」の中のこうした言葉の影響を受けて自身の「通俗社会学」の残存概念を一掃したのだと断定的に言うことはできない。しかし私は魯迅が強調して指摘した言葉、つまり空っぽでない作品を書こうとするなら、作者は真なる憧憬の念を持たねばならないという言葉が必ずや決定的作用を果たしたということを信じて疑わないものである。

胡風の文芸思想が初期から魯迅の大きな影響を受けていたと言っても誰も異議を唱えるものはいない。というのは、これは、根拠となる文章や手紙があるからである。しかし魯迅が二十年代中期に受け入れた文芸思想が、主要にはトロツキーによるものであり、それゆえ胡風も間接的にトロツキーの影響を受けたというなら、おそらく幾人かの人から抗議を受けることになろう。私はまた前でこう言った。胡風が当時受けた影響は後の文芸や革命と文学に関する立場、さらには革命政府の文芸政策に関する立場などを決定づけさえした、と。だとしたら、さらに胡風の友人たちに悲憤を起こさせ、同時にかれの仇敵たちにひそかに快哉を叫ばせることになろう。

私がこのように胡風の初期文芸思想の発展を追い求めることは、ある人たちから見れば「悪人を助けて悪事をなし」、「井戸に落ちた人に石を投げつけている」ように見え、人々が胡風に被せようとした罪名つまり「トロツキスト容疑」を証拠立てているかのように見えるだろう。

胡風本人は多分この点非常に警戒していたのだろう、『十二』と魯迅の「後記」がかれに影響を与えたことに言及する際、魯迅がそれをわざわざ翻訳して長詩『十二』の「付録」としたトロツキーの「アレクサンドル・ブローク」には故意に触れていないのである。

しかし私たちはこの事実を見たからにはそのことをありのままに指摘しなければならない。胡風個人の研究のために必要であるからばかりでなく、胡風が代表する文芸理論の研究のため、また中共の反胡風運動の中から教訓をくみ取るためにもより一層必要なのである。私たちは詳細かつ正確に胡風の文芸思想全体を認識して初めて、そこから何を継承すべきで何を批判すべきかを選択することができるのである。そして、そのことによって今後の革命的文芸思潮に資することになるのだ。とりわけ革命の中から生まれた政府が文芸に対して正しい方向と政策を採り、胡風批判のような悲劇を繰り返さないようにすることができるのである。

私の個人的立場からするに、胡風が初期にトロツキーの文芸思想の影響を受けたという事実から、この独立自尊の文芸畑の園丁に従来

にもまして敬意を抱くようになったのであった。

それでは、胡風には「トロツキスト容疑」があったのであろうか。私たちの断固たる回答は、まったくない、というものである。

胡風は基本的に革命的文芸工作者であって、革命的政治活動家ではなかった。彼の文芸方面において形成された何らかの見解は、政治問題に対する認識にまで敷衍されることは不可能だったし、そうしたことはなかった。

胡風の夫人梅志が書いた『往事煙のごとし』[15]の中で、以下のような胡風の独白が記されている。

「李大釗烈士が犠牲となった絞首台の傍らで、私は感情の高まりを覚えた。私は当時、理想を追い求める一青年として革命に対する初歩的だが純粋なあこがれを感じた。しかし、人民のために身を捧げる本当の覚悟はなかったので、革命の集団的教育を受ける機会を曖昧なままに失ってしまった。後に大革命期［一九二五～一九二七年の国民革命期を指す］の炎のような闘争に参加しはしたもの、個人的な興味もあり、武器を取って私の導き手にしたがって革命の坩堝の中に身を投ずることはせず、先輩たちのアドバイスを聞き入れて、より楽な方の革命の道を歩んだのであった。」（『往事如煙』［原著］一一一頁参照。これは一九九三年［これは明らかな誤記・誤植で正しくは一九六六年一月のこと］胡風が監禁から「獄外執行」に待遇が変わり、北京に参観につれていかれた後で書いた感想の一である。）

これは非常に誠実で真率な自己解剖である。冤罪を受けたことに起因する極めて当然の多少の恨みごとをのぞいて、すべての言葉は肺腑をえぐる言葉である。私がここで彼のために少しばかり補っておかなければならないのは、次のようなことだけである。各人の天賦の才能、関心はそれぞれであり、とくに知識分子はその専門性と得意分野で革命事業に献身するのであって「楽」とか「楽でない」とかの別はないのである。筆でこの事業に従事することが、銃で反抗することと価値的に高低があるということはないのである。

私は胡風が革命に参加した経過を知らないし、胡風の政治的見解を述べたいかなる文章も読んだことはない。ただ胡風のこの二編の遺作から見るに（当然不十分ではあるが）、彼の一般的な革命政治及び特異なソ連と中共内部の闘争とその変化に対する関心と興味は、中

国文壇の出来事、変化に対する関心と興味に遠く及ばないようである。一例を挙げよう。瞿秋白は魯迅の三十年代の親しい友人であった。魯迅は当時『史記』の中の二句「人生一知己を得れば足れり、斯の世当に同懐を以て視るべし」［この句の出典は正しくは清の何瓦琴の句］[16]をとり、瞿秋白に送った。理屈から言えば、魯迅の近しい弟子の一人たる胡風に、革命政治についてそれなりの関心があったなら瞿秋白のおかれた状況を苦もなく詳細にわかっていたはずであるのだが、文中で胡風は「私は瞿秋白同志のおかれた政治状況を知らなかった」と言っている。

この言葉は、胡風の建前とは受け取れず、字義通りの宣言なのである。「魯迅先生」の一文は一九八四年に書かれ、このとき瞿秋白はすでに党内で名誉回復しており冤罪は晴らされていた。もし胡風が瞿秋白に対する見方を（かりに瞿秋白に親近感を持っていたならの話だが）正直に語ったとしても、「罪状を加える」ことにはもうならなかったのである。

革命的文芸工作者は、災禍だらけの二十年代、三十年代の中国で暮らしていたのであり、たとえ政治に関心がそれほどなくとも実際どうしたって政治に巻き込まれてしまったのである。政治に巻き込まれた文芸家のうち、ある者は多分に理知から発して政治をはっきり知ろうとし、またある者は多分に感情から闘争に参加していったのである。胡風の例について言えば、おそらくは後者に属すると私は思う（私は思うとしか言えない。というのはこの見方を支える文献と事実とがあまりに不足しているからである）。

抑圧者たる帝国主義と被抑圧者たる中国人民との間で、また「先に内を安んじ、しかる後に外を打つ」という国民党と、中国人民の頭上にのしかかる「三つの大山」[17]を何とかどかそうとする中共との間で、さらには中国資本・帝国主義国家と十月革命によって生まれたソ連との間では、胡風は他のすべての先進的文芸活動家と同様に終始一貫何の躊躇もなく後者を擁護し、前者に反対したのであった。しかし、政治・経済、歴史的推移という観点からこうした関係を絶えず検討し、擁護の様々な方式を決定するというのは、私の知る限り、易しいことではなく、そのためそうした例はまれであった。とりわけソ連に対する態度という問題では、当時（主要には一九三〇年代初期）スターリンの統治下でソ連の経済建設は大きな成果を上げる一方、アメリカを初めとする資本主義国家は空前の経済危機に陥っていたため、相対する陣営の間で、資本主義世界の優れた文人、学者のほとんどすべてが「ソ連の友人」、スターリンの熱烈な崇拝者となっていた。こうした人々の間では、ジッドやデューイを例外として、みなそうだったのである。同時期に発生したソ連共産党内の思想・組

織上の根本的変化や十月革命の指導者や早くからのソ連の指導者がみなありもしない罪で殺されていくことなどの事実に対しては、故意に無視されるか、容認されたり、賞賛されたりさえしたのであった。

中国では魯迅のような賢者ですらこうした大きな流れ、つまり「スターリン先生」の成果を賞賛し、魯迅自身が一貫して文芸創作と文芸政策の点で完全に賛成してきたトロツキーを極力貶めたり、疎んじたりするという流れに相当程度つきしたがわざるをえなかったのである。

胡風は文芸思想上、間接的にトロツキーの影響を受けながら、トロツキー派になることはできず、その後も文芸創作に関する理論については相変わらず多少トロツキーの影響を保持し続けたのに、政治上は完全にスターリン擁護、反トロツキーであったが、上述の状況を考えればこれは極めて当然のことであった。

けれども私のような自覚的なトロツキー派の立場から見ると、胡風がトロツキー派に反対したこと、文芸思想上の「反通俗社会学」から政治上の通俗（ここでは官僚と読みかえてもいい）社会学反対にまで進むことによって「トロツキー派」に転ずるというところまでいけなかったことこそ、まさしく胡風の精神的苦痛の最大の根源であったのである。

苦難を受けて後、胡風は有名な感嘆の言葉を発したことがある。「心安らかにして理を得ず」と。

しかし、もし胡風が真のトロツキー派になっていたなら、その身が受ける苦難はより一層大きく悲惨なものになっていたかもしれないが、彼は心安らかにして理を得た[18]であろう。なぜなら「仁を求めて仁を得」れば［『論語』「述而篇」の句］、恨むべきところは何もないからである。

一九九三年十一月二十一日完

草稿ができあがって友人の一人に見てもらったところ、一カ所私が胡風の文意を誤解している可能性があると言う。胡風は「私は廚川の出発点が唯心論であることは知ってはいたが、このとき魯迅の「後記」はそうした私の認識を一層確信させてくれたのであった」と言っている。友人の見解によれば、ここで言っているのは魯迅の「後記」が廚川の唯心論の出発点をよりはっきり胡風に認識される助けと

なったにすぎないというのである。ここでは通俗社会学とは何も関係ない、したがって私が文中で胡風に代わって補ったような意味はない、と。つまり胡風は廚川が唯心論から出発しながらかえってよりよく創作過程を分析したことを見て、心中の「通俗社会学」の残滓をさらに一掃したというようなことはまったくない、というのだ。私は友人の指摘を受け入れることはできない。理由は四点。一、廚川の唯心論はまったく明白で、胡風はとっくに知っており、魯迅の「後記」を待つまでもなかった。二、「後記」には『苦悶の象徴』に触れる点がまったくない。三、もし胡風の本意が「後記」や『十二』が、廚川の唯心論的立場についての胡風の認識を強化したというなら、なぜそのことを持ち出して、「後記」を読んで通俗社会学を一掃としたということと一緒に並べたのであろうか。四、この二つの事柄を極めて短い数行の文中に並べた意図は明らかに、「通俗社会学」と「唯心論的出発点」との間の関係を指摘しようとしたのである。胡風はここで自分の言わんとするところを十分説明してはいないが、私が前述したとおり、読者が子細に読めば、その真意を把握することができるのである。

［一九九三年］十一月二十三日記

（注）

（1）楼国華（楼子春）著「長達半世紀的一件歴史公案」（一九九三年七月三〇日付。香港『十月評論』第一六九期、一九九四年三月掲載）及び、鄭超麟著「読胡風『魯迅先生』長文有感」（一九九三年八月二三日付。『魯迅研究月刊』同年第一〇期掲載）。後者の拙訳は『トロツキー研究』No.13（一九九四年、一二月）に掲載。

（2）『双山回憶録』香港周紀行出版社、一九七七年、二〇五～二〇六頁。同書増補版、香港士林図書服務社、一九九四年、二三八頁。邦訳矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』柘植書房、一九七九年、一七六頁。ここでは拙訳による。

（3）原題は「我対于魯迅之認識」。原載は『宇宙風』散文十日刊第五二期、一九三七年一一月二一日付。ここでは、『陳独秀著作選』第三巻、上海人民出版社、一九九三年、所収のテクストと校合した。

（4）魯迅は「私はいかにして小説を書き始めたのか」（一九三三年三月五日付の作。『南腔北調集』所収）で、わざわざ陳独秀の名を挙げ、小説を書くよう激励してくれたことを記している。

（5）胡風著「魯迅先生」中の一節、『新文学史料』一九九三年第一期、八頁。

（6）胡風が一九五四年に中共中央に提出した意見書、「関于解放以来的文芸実践情況的報告」のこと。周揚らによる、おりからの胡風批判に対する反批判として書かれたもの。「給党中央的信」「幾年来的経過簡況」「関于幾個理論性問題的説明材料」「事実挙例和関于党性」「作為参考的建議」の五部からなる。これに対して、毛沢東は自ら胡風を反革命と規定し、胡風批判の大キャンペーンが展開された。この長文は現在では『胡風全集』（湖北人民出版社、一九九九年）第六巻に収録。また、胡風生誕百年を記念して全集からこの部分を取り出す形で『胡風三十万言書』（湖北人民出版社、二〇〇三年）が単行本化されている。なお、「関于幾個理論性問題的説明材料」と「作為参考的建議」は『現代中国文学』第一二巻「評論・散文」巻（河出書房新社、一九七一年）に邦訳が収められている。杉本達夫・牧田英二訳。

（7）中国語訳は胡敷訳『十二個』（未名社、一九二六年）。魯迅は本書のために「後記」を執筆するとともに、トロツキーの『文学と革命』（日本語版茂森唯士訳、改造社、一九二五年刊）から第三章「アレクサンドル・ブロック」を訳し、付録として収録した。上海図書館蔵の本書巻末の未名叢刊広告には次のような紹介がある「露国ブローク作の長詩、胡敷訳。作者はもともと有名な都会詩人で、この一篇は革命時代の変化と動揺を描き、畢生の傑作として殊に名高い。原文から訳し、幾度もの校訂を経ており、重訳されたものとはかなり異なる。（後略）」（拙稿「魯迅『革命人』の成立」「猫頭鷹」第六号、一九八七年から採録）とある。

なお、王凡西の本稿（一九九四年発表）は拙稿「魯迅『革命人』の成立」（一九八七年発表）とオーバーラップする点が多々あるが、当時氏と筆者とは通信がなく、これは互いに独立した思考の結果である。論理的にそして虚心に魯迅のテクストを読んだ結果と言える。

（8）魯迅が子細に校合したことはその通りで、『魯迅全集』第七巻『集外集拾遺』所収の「『十二』後記」にその経緯が記されている。なお、『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（風間書房、一九五九年初版）によれば、中国語版『十二個』出版の一九二六年八月（大正十五年八月）までに、出版されていたブロークの日本語翻訳作品は以下の三点。黒田辰男訳『愛と詩の国家奉仕について』新潮社、大正十五年。古川清訳『アレクサンドル・ブローク詩集』曙覧研究会、大正十五年。黒田辰男訳『運命の歌』新潮社、大正十五年。これら現物を見ないと断言はできないが、中国語版翻訳以前に日本語版は出ていないようである。

（9）実際にはこの付録は詩の「後」ではなく、巻頭に置かれた。前掲魯迅著「『十二』後記」参照。なお、この魯迅の訳文は原著者がトロツキーだったためどの版の『魯迅全集』にも、また『魯迅訳文集』にも、さらには近年の劉雲峰編『魯迅佚文全集』上下（群言出版社、二〇〇一年）にも未収録で、これを見るには初出のこの中国語版『十二個』に当たるほかない。ちなみに唐弢著「『魯迅全集補遺続編』編校後記」（一九五二年上海出版公司刊同書所収）に魯迅のテクストで「見つかってはいるが未収録のものに『アレクサンドル・ブローク』の訳文一篇があるが、これは反革命者トロツキーの原著なるがゆえである」とある。前掲注7の拙稿注9参照。

（10）学研日本語版『魯迅全集』第九巻はこの部分を「ひそかに嘆息したり、叱咤したりする革命家」とするが、これでは文意がとおりづらい。『辞源』（縮印合訂本、香港商務印書館、一九八七年）では、「喑嗚」は確かに「呑声悲咽」とあるが、「喑噁叱咤」という成語もあり、意味を「発怒喝叫声」とし、出典は『史記』「淮陰侯伝」の、「項王喑噁叱咤、千人皆廃」とする。「嗚」と「噁」には同音の読みがある（wu の第一声）。文脈から考えて、

ここでの魯迅の意図は「喑噁叱咤」ではないかと思われる。本稿では「喑噁叱咤」の意と解して訳した。

(11) この部分はトロツキー『文学と革命』第八章「革命の芸術と社会主義の芸術」にある一節。前掲注7の拙稿参照。

(12) 人民文学出版社二〇〇五年新版『魯迅全集』では第六巻、五五五頁にこの通りの言葉がある。学研日本語版『魯迅全集』では第八巻、六〇二頁。

(13) 胡風が「文芸問題に対する意見書」の中で批判している、作家を脅かす、五つの要求・観点をいう。一、完全無欠の共産主義的世界観。二、生活には労農兵のそれがあるだけで、日常生活はない。三、思想改造して初めて創作が可能になる。四、過去の形式だけが民族形式である。五、題材には重要なものとそうでないものがある。

(14) 「『十二』後記」の引用は学研版『魯迅全集』に基本的に従うが、一部訳を手直した部分がある。

(15) 原題は『往事如煙』一九八七年、北京三聯書店。邦訳は関根謙訳『胡風追想』東方書店、一九九一年刊。ここは拙訳による。

(16) 学研版『魯迅全集』第七巻の丸山昇著「解説」は魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』（人民文学出版社、一九八四年。新版増訂版は二〇〇〇年に出ている）に基づいて、清人何瓦琴が「王羲之の「蘭亭帳」の字体を集めて、自分の句を書いたものか」とするが、その通りのようである。研究書や研究誌で見たような気もするが、思い出せない上、検索もうまくいかなかったので、中国大陸の複数のインターネットサイトで調べてみた。それらによれば、何瓦琴は清代の人で、金石篆刻に優れ、著に『益寿館吉金図』がある。何は「蘭亭帳」の字からこの対聯を作句し、徐時棟（一八一四―一八七三、字定宇、号は柳泉、浙江鄞県の人、道光年間の挙人、内閣中書を歴任、後著作に専念）に書写を依頼、徐はこれを大いに好み、自著『煙嶼楼集』に収録した。魯迅はこの書を一九三三年二月に購入している、ということだ（http://www.wxrb.com/wwh/rwcq/rwcq_03.htm や www.ebaomonthly.com/window/liter/chlit/ch10/ch10_7.htm　参照）。『魯迅全集』日記巻の同年二月二日の条には確かに「『李太白集』一部四冊、『煙嶼楼読書誌』一部八冊計五元を買う」とある。また、前掲『魯迅年譜』第三巻によれば、魯迅が瞿秋白にこの対聯を送ったのは、同年三月六日ということだから平仄はあう。

王凡西がここで『史記』が出典だと言っているのは、著者生前の訳者宛書信によれば、胡風が「魯迅先生」の中で、そう書いているためで（『新文学史料』一九九三年第一期、第二〇頁）、そのままこれを踏襲してしまったということだ。

(17) 毛沢東の有名な老三編の一、「愚公移山」（一九四五年六月、中共第七回大会の閉幕の辞。『毛沢東選集』第三巻所収）では、中国人民を圧迫する帝国主義と封建主義を「二つの大山」になぞらえている。ここで、王凡西が「三つの大山」と言っているのは、中共を弾圧する国民党をこれらに加えたということか。

(18) 原文は「心安理得」。心が落ち着いて安らかな状態を言う。